



TITLE:

<批評・紹介>P.Pelliot, notes critiques d'histoire kalmouke

AUTHOR(S):

羽田, 明

---

CITATION:

羽田, 明. <批評・紹介>P.Pelliot, notes critiques d'histoire kalmouke.  
東洋史研究 1961, 20(2): 100-101

ISSUE DATE:

1961-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/148209>

RIGHT:

たが、このため同名の者が約三十人もある。これらは、モンゴル人の習俗にもよるが、また一つには音を外國文字でうつすため、あるいはそれを更に誤寫するために生ずる混亂にもとづくものである。そして、これがモンゴル史研究の最大の隘路ともなってきた。とくに「元史」においてはこの混亂が甚しい。と云っても、東アジアに關しては、「元史」以上の根本史料が存在しない以上まずこの混亂を整理する必要がある。この意味では、現在京都大學で刊行中の元史語彙集成（全三卷の豫定）は、かなり明確にし得ると確信する。私もこの事業の一端を受け持つて仕事を進めている間に、「元史」の地名・人名の整理の必要を感じていた時だけに、本書に接して、その偉大さに驚かされた。しかし本書においても前述した通り、内容的には著者の學風通り、精緻堅實ではあるが、必ずしも充分とは云えないものがあるように思われる。

また本書は遺稿であつて著者はすでに一九四五年他界しており、本書の原稿は一九四〇年頃までに作られたもので、この間我が國においても岩村忍教授の「マルコ・ポーロ」の研究をはじめ、幾つかの研究が行われている。このような點から尙参照すべきものもあると思われる。又細かい點に至つては、五頁下から二行目「元史の引用をMarch（3月）としてあるが、これはFebruary（2月）の間違ひであり、三〇八頁十三行 Nobugasu は Nobuyasu の ミスプリントなどの誤りもある。

もっとも、本來本書のような性質の書物に完璧を望む方が無理である。しかしそのままに放置しておくことは甚だ忍びがたい。今後學問の専門分化が進むにつれて恐らく修正増補すべきものもあらわれてくるだろう。これらは各専門家の協力によって今後ますますよ

り完全なものに近づけて行くことが望ましい。ともあれ、他と異つて甚だ研究困難な分野にあつて、よくその困難を克服してここまで成し遂げた著者の努力に對しては深く敬意を表わすものである。このさい、一日もすみやかに全卷完結されんことを望む。

おわりに臨んで、本紹介はAからCに至る第一分冊を一覽したただけであるため、充分意を盡せなかつた所もあり、あるいはかえつて本書の偉大さを傷つける所もあつたと思われるが、これは筆者の淺學によるものである。

なお、本紹介は京大羽田明教授への寄贈本を借覽しえたことによるもので、同教授に對して厚く感謝する次第である。（萩原淳平）

P. Pelliot, notes critiques d'histoire kalmouke,  
Librairie Adrien-Maisonneuve, Paris, 1960

本書はペリオ遺稿集の第六卷に當り、既刊の各卷と同様に、ペリオの授業の弟子で現在シナ學研究所の主任教授である Louis Hambis 氏の編纂するところである。ハムビス教授の緒言によれば、本書はもとゞと Baddeley, Russia, Mongolia, China, 2 Vols. 1919 の書評として起稿されたものに、カルムック史關係の若干の根本的な中國史料——欽定外藩蒙古回部王公表傳、御製準噶爾全部紀略、西域聞見錄、欽定新疆識略などの關係部分——の譯註を加えたもので、一九二〇年から間もないころ、すでに脱稿していたが、推敲の必要があるという理由から、久しく篋底に藏されたままになつてい

たものらしい。ペリオの校閲を経たというグルセの東亞史（一九二九）などにつとにこの書に示されている見解が取入れられているのも不思議ではない。

本文一冊、系圖二冊の二冊からなる本書の内容を簡単に紹介すれば、初期の露清關係を論じ、パッデレーの書に概括的な批評を加えた序説につぐ第一章「カルムツク族の諸名稱」ではカルムツクの族稱からはじめて、オイラート族およびその諸部族の名稱に溯り、エルート（厄魯特）、ジュンガル（準噶爾）の呼稱におよんでいる。

第二章は準噶爾全部紀略の完譯。第三章「十七世紀初期までのジュンガル部」では明代のオイラート（瓦剌）とジュンガル部との關係を跡づける。第四章は表傳・卷八十一、青海厄魯特部總傳の譯。第五章「ジュンガル部長バートウル・ホンタイジの系譜」で、表傳・卷七十七にみえるところに據つて、バートウル・ホンタイジの父のハラフル（哈喇呼勒）とバートウル・ホンタイジ自身の本名であるホドホチン（和多和沁）を同一視するハワース以來の誤を指摘し、バートウルの諸子の數や長幼の序が書物によつて異なることを注意するとともに、ボズドニエフの書にみえるカルムツク族の系圖が實は表傳に基いて作られたものにすぎないことを明かにしてパッデレーの誤りを訂正する。第六章は表傳・卷之百一のトルグート（土爾扈特）部總傳の譯、第七章「ケレイトとトルグート」はトルグートが元代のケレイトのちにほかならないことを論證したものであり、その大體は先きに Notes sur le Turkestan, T'oung-pao, 1930 のうちに發表されている。第八章は西域聞見錄・卷六、土爾扈特投誠記のほん譯である。第九章、第十章はカザーフ（哈薩克）族研究で、清代の諸書にみえるカザーフ族の三部が實は中オル

ダの諸分支にすぎないことを明かにし、新疆識略・卷十二、外商・哈薩克の條を譯出したのち、その世系を批判する。本文は以上の十章で紙數からいへば僅かに四四頁にすぎないが、五六頁、總計三四八項目を數える詳しい註が附せられており、もつとも參考するに値する。一三五頁におよぶ索引は檢索に便であるし西域同文志、表傳をもとにして作製された別冊の五葉の折込の系圖もすこぶる要領を得ていて、編纂者の苦心が窺われる。

最後に批評であるが、エルート、ジュンガルなどの稱呼についてはかつて論じたことがあるし、バートウル・ホンタイジの諸子の數や長幼の序については、近く東方學に發表する論文で検討しておいたから、ここでは觸れない。細部に關しては、詳しく調べればさらに疑問の點や訂正すべき點が見いだされるであらう。それはこの種の書物の性質としては、むしろ當然のことで、毫も本書の價値を減じるものではない。ただ一つ不審に堪えないのは、我々の手許にはない表傳（それも滿漢兩本）のような稀觀書をはじめ、多くの清代の史書を博搜しながら、もつとも簡潔で、しかももつとも信頼するに足ると考えられる祁韻士の名著皇朝藩部要略を利用していないことである。それはしばしばいわれるように、ペリオが考證學者であつて、歴史家ではないからなのであらうか。（羽田 明）